

コーヒーゼリー

冷蔵庫を開くと、そこにはコーヒーゼリーがあった。彼女は一度あごに手をやって考えた。

まず自分では買わない。コーヒーやゴーヤなど、苦いものは嫌いだ。食べる前から「いらない」と言っていたし、実家も彼女の嫌いなものは出さないようになっていた。

けれどもどうしたことか、あるのだ。コーヒーゼリーが。黒に近い茶色のゼリーに、ココア色のクリームのようなものが乗っている。

「……姉さんか」

こんなものを食べるのは姉しかおるまい、と彼女は結論付けた。

実家から、大学に近いここへの引っ越しは一家総出で行われた。……というよりは両親と姉しかいないが。家具の運び込み、組み立て、などは業者の手を借りずにやった。

おそらくはその際に姉が忘れていったのだろう。あの人の好物はコーヒーゼリーだから。

臉を閉じると、いつもソファアにどっかりと座ってコーヒーゼリーを食べている姉が思い浮かぶ。三つほど離れていて、別の地方の大学に通っている。

実家に住んでいた頃のある日、尋ねてみたことがある。

「なんでそんな苦いもの食べてるの？」

コーヒーゼリー。苦い苦いブラックコーヒーを、かためたもの、という認識があった。信じられない食べ物の中の一つ。

「ん？」

銀色のスプーンがきらりと日光を反射して、真つ黒な表面に柔らかくひびを入れる。そこからクリームが侵入して、あつという間に上下の均衡が崩れた。

姉はその様子をじっと見つめてから、こちらをちらりとも見ないで返事した。

「あなたが思ってるほど苦くないよ」

すらりと長い脚を組み替えて、スプーンですくったゼリーを口の中に流し込む。その姿は大人のようなだった。

いや、実際には姉はすでに成人していたのだが。

とりあえず、ひとまずは置いておくことにする。

彼女は冷蔵庫の扉を慎重に閉めて、新品の座椅子に腰を預ける。そして、なんとということもなくスマホを手繰り寄せて、だらりとSNSを這いずり回る。

かわいいと少しでも思ったものには「いいね！」をつけて。悪いと思ったものは投稿者をブロックして。

いつもと……実家にいた頃と変わらない。

……もしかしたら、案外大学生というのもすぐくはないのかも
しれない。

いつだってそうだった。姉が高校の制服に初めて袖を通したとき、彼女もそれまでかわいいと思っていた中学の制服に失望したのだ。あんまりかわいくないと。

それで、姉が大学に進んだら今度は高校のシステムにがっかりして。

姉の背中を追いかけるような人生だった。新しい環境ではつらつと振舞う姉におのれの理想を重ねていた。それで、自分が追い付いたら「こんなものか」と勝手に失望して。

座椅子から立ち上がり、小さな食器棚からスプーンを取り出して、冷蔵庫の前に立つ。

深呼吸を一つして、しゃがんだ。

扉を開ける。そこには先程とは全く変わらない出で立ちで、コーヒーゼリーが鎮座していた。左手を伸ばして、掌の中におさめる。以前、姉が食べていたものと同じはずだが、一回り小さくなっているようだ。

冷蔵庫を閉めて、ペリ、とその深緑のラベルを剥がす。クリームがわずかに付着していた。人の目がない今、舐めてしまっても問題ないが、彼女は数秒考えた末にゴミ箱に放った。スプーンを表面に沈めると、やはりクリームが下のゼリーと混ざった。そのままぐちゃぐちゃとかき混ぜてしまえば、

境界線なんてすぐになくなる。

そこからひとすくい。苦ければ捨ててしまえばいい。

目をつむって、ぱく、と食べた。

「…苦く、ない」

思ったより苦くない。ゼリーの苦さを、クリームが中和してくれているのだろう。

不思議とそこに失望はなかった。

自分がちよつとだけ大人になっただけのような。

彼女ははつと顔を上げた。姉がそこにいる気がして。

けれどももちろん、いない。

少しの時間、彼女はコーヒーゼリーとスプーンを手に立ち尽くしていた。

二口目を食べて、三口目も食べて、だいたい六口ぐらいで食べ終えた。

ゼリーの空き容器とスプーンをシンクに置いて、彼女はまたスマホをとる。メッセージアプリを立ち上げて、上の方にあった姉の名前をタップする。

『コーヒーゼリーってあんまり苦くないもんだね』

すぐに既読がついた。

『世の中そんなもんだよ』

姉の返信は簡潔だった。

開けっ放しの窓から少し強めの風が吹き込んで、そのまま

反対側の窓から出て行った。